

芭蕉翁
發句解

說叢大全

五止



蕉翁發句說叢大全卷第五

葛飾 素丸 著述

全 南臺 檢校

秋部下

冬部

伊勢の守武が云ひくは
秋風と云ふは
秋朝の風

美朝乃るるよ
秋朝の風

林
云も武り云くは
秋朝の風
秋朝の風

なくを殘して一句のまにまに... 秋風のせん
とを... 解云只所問の内海の秋風は海と云ふは... 句を
えく... 歐陽永叔秋聲賦曰... 袋此句を出さず

説 此句詞書をなして... 評林よ... 句解
小記... 秋風のまにまに... 林例の
含糊... 句を... 書は... 句を...
... 秋風のまにまに... 記
... 秋風のまにまに... 記
... 秋風のまにまに... 記

二

... 秋の... 義物の... 俳諧... 風雅
... 古代の俳諧... 理屈... 風雅
の道理... 人... 木曾を
... 妾邪餘多也... 信...
... 妾邪餘多也... 信...
又一層々也... 解... 廉末... 秋の暮

枯枝... 乃... 秋の暮

袋 云是暮秋の寂... 船を... 連枯枝... 舟... 人... 舟... 舟...

わげ芭蕉の骨法是る方一 [解] 云此句ハ季吟芭蕉素堂 派
新立の茶話口傳の一章也夫木集よ益鎮和尚を為初くらとや
せんうひてより我歟の肢乃おを流しきよこまればんより叶へ口
一とせの花江葉の葉枯とくく人間毎常の觀想もわを魚一 [林]
此句と出さ

〔説〕 〔袋〕 小鶴と記さる大よ得たりといんもの也文字あまるゆへ 鶴
めてらる一と古式よつかうはる僻見より 鶴と記さるめや可笑
○ 宗瑞曰鶴と記さる鴨と見たてて誤しぬらん可也 廉末
の至也 ○ 鶴のゆりゆりやういへ譬喩也と云得りしはゆりゆり
枯木よ鳥のさゆり居るると云へ譬喩なりて此句の正脈と云

しるすの也 [解] 云此所の季吟芭蕉素堂新立の茶話口傳と云
事いぬらう一 素堂と季吟の對面いぬらう也 黒露よす一が是も
右のごとく答へ一 季吟誄諧と業とくわのいへす 活よ住す 閑坐
へ召居り節ハたさげ小俳傳をつてて ともハ平字と業と一とす
誄諧とたさげ 季吟と節ハ 師弟の事なりハ口傳の茶話もわら
屋一 素堂江戸の深川に居て何と見よらづからんや 思ふは菊江
戸へ多て素堂に隣家たり 但深川六右衛門隣家と素堂の文もわらぬと云
ハ此もまたらより二三丁程も居る
狂風雅よまか依て此句の相誤等わらて 正風船一派の新立の誓盟
有 杉風使とて此誓盟
元禄年中のまじ 知ると世不傳へ遠ひて つかや 如此からんよハ
季吟も亦何ぞ此誓約のわらつらんや 雖信用者也 一犬の虚傳万

犬と知るとぬ ○ 芭の句 志が、いふ屋うは、余情よあつて、百
 年とくたぬを、いふ、今も堂上よ、此句は家々の浦に、よまふ
 色並ぬ、夕べと、或人語の、真偽ハ、都て、名句と云ふ、解、さぬ、ハ、ツと、つ、自
 開悟解得も、あからに、さ、さ、ハ、解、さ、さ、ハ、ツと、つ、自
 證歌と思ひ、夫、木妙、山如の、切、字、と、示現、ハ、
 乃、さ、さ、ハ、解、さ、さ、ハ、ツと、つ、自
 沈平也、井蛙井又連俳 焦要もくし 此、さ、さ、ハ、解、さ、さ、ハ、ツと、つ、自

此通や、人か、小秋の、

袋 云此句ハ秋の寂、さ、さ、ハ、解、さ、さ、ハ、ツと、つ、自
 秋す、句と、さ、さ、ハ、解、さ、さ、ハ、ツと、つ、自
 行、さ、さ、ハ、解、さ、さ、ハ、ツと、つ、自

説 袋 志、さ、さ、ハ、解、さ、さ、ハ、ツと、つ、自

ハ注、け、さ、さ、ハ、解、さ、さ、ハ、ツと、つ、自

と、此、句、ハ、空、山、さ、さ、ハ、解、さ、さ、ハ、ツと、つ、自

と、こ、な、人、さ、さ、ハ、解、さ、さ、ハ、ツと、つ、自

秋、さ、さ、ハ、解、さ、さ、ハ、ツと、つ、自

の、通、さ、さ、ハ、解、さ、さ、ハ、ツと、つ、自

人、さ、さ、ハ、解、さ、さ、ハ、ツと、つ、自

詩平ふも。そとあり有と何とこいふも徒言也。何とこもあまた
 なりけきたまやうよ。又時の信切を述ること。句うたトべられ。又
 俳諧よ携りふ人なきとをげくとも。保くすむ。け外も。さま
 く。無事の辨も。り。る。る。心骨ふ。り。た。ま。あ。あ
 てい。ん。小。右。風。の。入。か。が。初。ら。る。理。屈。新。談。小。の。こ。拾。ひ。て。
 其。實。の。風。非。と。た。つ。ひ。人。なき。を。一。き。あ。こ。よ。歌。く。や。と。い。り。ん。は。
 苦。し。う。す。ま。や。本。曾。れ。情。の。句。と。勇。烈。よ。こ。へ。ら。注。者。を。の。
 る。ぐ。ん。と。歌。く。り。時。も。り。を。一。結。く。り。解。と。き。事。や。
 桐乃亦よ鶯なりくも海堀の内

袋 云此句意有て世に庸らむを寂寥多と物淋しくさるす
 人への挨拶也桐の木の風風の極くきよん然もとも堀の内小
 鶯鳴ことさひまらり足夕さへハ此色の秋風身ありて鶯
 鳴し保原此里と本ありて今ハ堀の内めも啼こと何や

林解 此句と出り也

説袋 一向の邪註。笑而断悞と云是也。引あもつるふま
 とくろも也。子。説。少。と。及。む。古。説。と。奉。て。澄。と。す。ん。ん。と。

古今抄廿一。小まのの證句小此句と奉て曰鶯の章ハ
 田舎の酒家と云頭ありて。こゝろより。田舎の宿半ハ所思
 たりけり。保く。と。も。み。文。字。小。句。と。切。て。桐。の。木。や。と。云。へ。り。ん。と。こ。

下ハ桐の本此發句なるん。是ハ桐少と云へば、鶯の中もあらず。四
 家と松ぞる。お句多し。鶯鳴ありと句と切て、塙の月と隔へ
 きやと云へば、況や鶯鳴なることハ句法も古平の裁入るるとや。
 今やハの字、鶯と活を、遠く田莊此白鷺と云やうて、そ
 桐の亦くあると思へば、多ふと云へば、屋上や、あると武
 人乃歌にけしハ、發句ハ類とあつたや、初くと勅う、此の海
 川にむ。此ハハ振の本此方あんと云へば、船用の海あきさや、是
 ハ鶯と鶯として桐と句作の用といふ。此うると振の松のこ
 を、官家の檜皮の姿あらし。桐と田家のるまなること、あや
 てや、そ日と家く此桐と、此は、此無くと云へば、一と云へば、此一

件あり。句意ハ、此うと也。盲人の邪説、由屋うとす。

老田の汁、社よまふで、愛盛が、兜錦のこ、此あり
 樋口ハ、二角が、使せ、こまの、つ、縁部よ、又、此あり

いざんや、お境の、あ、お、さ、ら、く、は、

袋 云是真盛う、鎧甲と云く、追悼の句也。渠先衰か、う、氣
 カハ、壯年と云、ち、死せ、一、盛と云、林の末声と云、さ、此ハ、確
 て、さ、い、さん、やか、し、重く、被、討、た、と、悼、る、言、は、る、と、い、ふ、す、て
 翁う物と形容ち、皆此類也。林云、河書ハ、愛盛の、錦の、い、ま、さ、し
 護、介、も、靈、流、の、冥、物、出、て、極、ま、せ、と、也、け、句、妙、く、の、事、極、り、り

上又文字うをきりくもををくう一文字一語乃極字如くくよ
よへてをらくをかう師のふか性多ういふせんくこと評
を残す解此句は出づ

〔説〕袋例の入がうふべくもけりず甲とよまてまらく書こハ
理屈のまうなる也。夕たや首飾らくもソムくことハ
古風のゆらや人すまはしり不可信用也。又之秋の末声す
るまき小聲とソへども此句吟せハ七月也。末声叶ハぬめや
又之秋と云ハ文法く三年のものと云。實靈の之周忌あらん
ふはまのまきも亦るか。秋風の殺聲なぐと
ゆらん文盲なる文言也。〔林〕まぐく卦ハはり保詞を思せ

一ハ何く切る句のことと云く。一ハ何くかあす予今のこと
とと怪よおと。○奥羽記行と考る小元禄二年七月十五日
加賀小松に布のた田の神社に詣つと云何かむさんやあとりり
存小あかの二字と云。是正風解よりむの也。あかむん
やあとし詞ハ實靈乃謡ハ小樋口の二節がソム一語也。其時の
洞と裁入する。而翁の子づま働ハ此より尋常の人をぬみ文
字よし。凡そよりくはを秘とへ。白意ハあきしう。故悟ハ
限たり。懐舊の句也。返悼やソハ何うまきや。古も入る
らど却て出さ者のうも名をてん。○宗瑞云あかむん
やあのみ文字たハ。あて麻屋きりくを。後ハ引裂や

とされ。檀林の餘風と改らんまゝありむ。今小世くおわくあか
む。ごんやむも却てわりなきものと言ふ可也

菊の後大根れかうけらふか

解 云不是花中偏愛菊此花閑後更無花と以て句のあか

てううれの余風ありありと **袋林** 此句と出ず

説 此詩の心よ叶つと解してハ翁の一風建門の心骨ふけ
らぬ少や。此詩と似て一語しる白也。ところが俳諧の意地
也。○拾玉集第一とせめてうつらふとのさきふ茶より
後出む一なるれとと意法和尚の詠有り。詩を引かむ及

と。考てけるの閑後此二字のうら **○** 拾芥抄曰世傳嵯峨
隱君子元稹詩不是花中偏愛菊此花閑後更無花と云
と愛吟と。一日忽元稹が形とえ示て曰花閑後誤也。花
閑盡也と云 **○** 宗瑞曰け句の更乃字ハ更無花の更とれ
ふらりと尤あり **○** 句意ハ此菊の後ハ 也と云きこのハ唯
大根のも也。悟人の真物とありと。隱者老衰の身よりハ菊を
隠して静す。大根ハ陽明に補ひをきハ。清茂寺人ハ
此より。其本意ハつきく菊の女おねよりやうりさるる更
と云字又とつて更とて。決而か一と云ふは何とて。葱を
あきと。さきき茶とくく。庵人ハ大根なるハと解す

是等れ字の言さるは、小のりても、翁の句法、秘んごうあるを
感とていふ也。○或人曰、此句右の句意あり、ひ小、その句、
兼ふことありて、又根、根也。予答、是は理論也。只兼れ
たの衰へ、うらぐるといふは、根より外に、あはれ、きとて
の、人、ま生の語も、や、ま、く、い、是、うら、火、好、の、を、せ
る、こと、は、ま、り、や、今日乃人、其の、ま、小、え、て、無、金、一、理、海、ハ、和、奇
の、風、非、小、の、り、か、う、さ、る、也。

座右銘

人の經とつふらとなれ
己が長とてくことか明し

そのいへば、唇をひらき、乃風

袋 云見ハ座右の語の句ありて、ま、う、ま、り、の、句、や、ん、と、形、容

して、り、ま、り、ま、り、と、て、訣、也。 **林** 解 此句と出、る、ん、

説 **袋** 一句の心と形容とを、ま、り、ま、り、と、い、ふ、は、名、也。 崔子玉の句、

和して、句、小、り、ら、と、注、して、可、也。 世俗、け、銘、と、も、翁、の、こ、と、
と、ま、り、ま、り、可、笑、也。 此、語、の、感、は、て、發、句、も、吟、せ、
き、一、事、あ、ら、う、也。 け、座、右、の、銘、ハ、誰、の、作、と、云、り、も、ま、り、
在、る、也。 初、学、の、ため、小、全、文、と、名、小、記、と、ま、り、無、し、思、ふ、べ、
ら、候。 ○ 後漢書曰、崔瑗字、子王、早、孤、銳、志、好、學、盡、能、

傳其父業作座右銘曰。無道人之短。無說己之長。施人慎。忽念受施。慎無忘世譽。不足慕。唯仁為紀綱。隱心而後動。謗議庸何傷。無使名過實。守愚聖所藏。在涅貴不緇。暖々内含光。柔弱生之徒。老氏誠剛強。行々鄙夫志。悠々故難量。慎言節飲食。知足勝不祥。行之苟有恒。久久自芬芳。○唇之むしりては唇盡。齒寒と云。語りり出たり。初當のむしりては故事と奉。○左傳僖公五年。晉侯再假道虞以伐虢。宮之奇諫曰。虢者虞之表也。虢亡則虞必從之。晉不可啓。冠不可翫。一之謂甚。共再之。

十

乎。諺謂輔車相依。唇亡齒寒。其虞虢之謂乎。○戰國策小國唇亡。大國齒寒。と云。ゆゑに唇の及ばざるものあるは是も亦ねりて世の俗語よ。多くりのあるはと云。口小風を入きりては思ひ合はれて此句を解と云。

増補

名月の花

○ 説
花雀の芭蕉句選よ。名月やふりてほろりとおかし

誤也いづきの集りてむしとえりてとまき ○東西夜話曰
 先師一とせ先と死の故とてそそりて名月のむしとみえて棉
 留とてそそりてハキハキ其死の世と居ての本綿のむのむと
 己の作意とてくハキハキあり連テと古詩古歌と用るハキハキ
 の縁ゆやゆらん云々とてそそり名月やと切も亦傳寫の誤也
 か。のむとよか。とや浪の下むとび

① 東西夜話曰先師のむし高瀬の濱に漢火と云題と
 てそそり此吟の今宵桃妖亭よけ句と評して曰無火不
 著うは奥をみまゝとてそそりむしとて一字くうそそりいりハキ

海光の麻の外ふ又りてむし一句の魂とてそそりてハキハキ
 と結も綴とて目一ハキハキとてりハキハキハキハキハキハキ
 所りてそそりて綴ハキハキハキハキハキハキハキハキ

② 此句檀林の比乃吟ふして最初ハキハキハキハキハキハキ
 洞ハキハキハキハキハキハキハキハキハキハキハキハキハキ
 〇五雜俎曰凄風苦雨之夜擁寒燈讀書時
 聞紙窗外芭蕉浙瀝作聲亦有致此處理會得過更無
 不堪情景とてハキハキハキハキハキハキハキハキハキハキ
 人も知る屋ハキハキハキハキハキハキハキハキハキハキハキ

芭蕉五

意と住しはましく万の翁もひとりの心なり也と云

○小あき　水蕙より大小の異種あり。今世俗のニツヤフシ多藝として。田

の中或る用の垣の中。田間の溝。又は沢池や。に生るる多葉夏

五六月澄菜の花等して。赤い葉のてくる。身ごとくくうふきくを

俵名抄水蕙藪水菜可食 和名又延喜式万葉集おもえ

えりり六和本草おもえの千枝くうくせこの説ハ誤るもの也

○小あきだれとも。寄北五尾の淵ふも也。予壯年より魚釣哉

好まうよ四十年。東西の葛西ハ跡ふた歩りきくふ。小あき

の七八月はまて吸しとる。その乃のうま。村の寺をどの物に

航の端くうりて。くうけく。好く腥臊ヒナガうりし。漆の残暑乃

時侯。女もたのり。○白氏文集 第三 新樂府 續 八人詩曰

朝食飢昌費孟盤。夜臥腥臊汚床席。い長臥腥臊ヒナガとた訓

小あきのやどあまうごいこよあり。阿仏尼いざようひの祀よと

りきてる。文章あり。初学のうま記と。

ひやくと。蟹とゆきえて。夏に味小

○説笈日記曰けむいふゆくと。アチカを只残暑。くう水

アヒカはす。板屋の釣ゆき。ゆふくう芭蕉うりし。思ふに

と思ひふる人ありと。中侍ハ此謎を支考よころけ侍。くう葉

ハの果物とる。○芭蕉行状記曰。元禄七年七月十日。又

伊賀の方へは、
あけくやも、
翁齡五十一、
難波に終る

石秋部下

十有三章

冬部

口切、
坪のき、

解 之深川支梁亭、
意是等ふ、
てふ、

説 句選よ、
解 さも、

ゆ、
う、

名よせけしんハ、翁の本言ハ背き多ん。○堺ハ利休の産土といひ
 又師紹踏田深乃地也とのいふ。海少一彦よ泉の本出言也と
 之ハ宗祇の發句と利休感のつて、茶類りともう此心なりと
 堺の露地ハ其振一し、霞もくう、志んじ、深川の露地も、海少
 えて、堺の産よ似せしむ、なれしきこの事多ん、かつし、た、あ、
 けら、露地もくう、くう、くう、くう、くう、くう、くう、くう、くう、くう、
 ても、け、親ハおぬ、一、又な、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、
 志、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、
 廻、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、
 志物居新とく、善友とく、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、
 十五

く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、
 海、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、
 とく、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、
 け、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、
 句、意ハ、夢、多、吟、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、
 十五

長嘯の塚とわづなを録する

解云長嘯子ハ木下右杖と号し金吾中納言秀秋の令見也
 長嘯子ハ、い、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、
 一、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、
 録

から海くらしす くらたきものあきかしの一尋ハをたぬ
 へも鳴わらさず 弟の河あり 是れを神さきとててくま
 推輿と云ふ也 其後神波の西鶴の辞かつ一の素徳士
 の辞あり 其角に移るきとてひて辞まき車連綿として
 其の傍に神さきとありよけを然とす ○ 句意ハ此が
 りてとや 淋しかりし車も 長嘯の辞よ
 ずりてなれど 何を憂くも夜毎ハ此墓を訪ひぬ
 といさめくも也 ぬがすハなるまいとて 只空然とてき
 入りし少なりとて 長嘯ハ小径山のかゝるありて 神
 歌の後にて なるも ずりて 只空然とて 只古風強

の古墳にありきと といはれり 長嘯ハ眼をくちをたぬ
 の也 祖師の空也 小径にて 長嘯の墓ハ麻糸よとてかとの美
 予さりて 人の偶作ハ 長嘯の文章とて 神歌といひ 於に
 予も かなを 知りて 長嘯とて 同人ありて 此事
 實を 記す といふ 長嘯ハ 神歌といひ 長嘯ハ 神歌といひ
 句とも ありて 長嘯ハ 神歌といひ

對門人僧

これやを及 蝶々 湯くぬ 古格子

盒子イ
合子イ

解

云此吟句選小古格子と知り 油日記小云行脚の五思也

非修之類一重きと通法師七条の持御南の詠草一贈くを
るくし河云りり(林)云齊蓮法師の作やよの深をのわれきかき
むの麻生りけかのつぎ連平初閑果の心まけ家のういよえつく
少はあゝねと何となくいふりうは風情なりと只うせて一句一首の
格とありよへへや媒はうけりて環の氣多伝とあり

○説 此解よ不審の事三ヶ條有り。其一小古格子云盒子友

松の内解 小古格子ハ誤也といへ。知れ在古きと集りも古格子と

去物と句選亦同じ。史邦が笈の小文庫も古。古今子と有り

香合子と解よつと誤る中よれをハ知れり。神日記の
名遠へ解よつと誤る中よれをハ知れり。神日記の

吏登がえへ云りて。古嵐雪の書小有り。先年我も

りありし。又けふもさくともいふ。古小有り。出た
しつち。又菟の古雲の古通よりともええと。何と
證として。盒子よ極りや。又路通七条の足湖南小送りと
ハ菟と別きて存七十年少や。年号も存日も有り。いふは此
しつちもさくとも。又菟の古云あり。湖南命。は
かれ。たや。たれ。疑。ハ好事の人。盒
子よ附會せん。ふ。ふ。ふ。信用。か
○才二小対門人僧と希古り。ふ。ふ。ふ。路通七条の河云の
ふ。ふ。ふ。二。ふ。ふ。ふ。又対門人僧の類云ハ
は。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。今對して

布（き）の如（し）即吟（と）るもさすい（と）又（又）猿亭小送（り）と見ると
 么（え）文（文）辰（辰）始（始）未（未）り（り）の（の）ぬ（ぬ）もの（の）ぬ。○ 片三小僧（は）と（と）所（所）の（の）を（を）格子（は）に（に）
 合（あ）て（て）是（こ）ハ（ハ）盒子（は）の（の）ぬ（ぬ）と（と）推（お）す（す）の（の）汝（は）信（は）り（り）か（か）。盒子（は）の（の）ぬ（ぬ）
 ぬ（ぬ）や（や）。柳（や）の（の）対（あ）門（は）人（は）僧（は）の（の）四（は）字（は）よ（は）を（を）入（は）り（り）ぬ（ぬ）。格子（は）の（の）ぬ（ぬ）と（と）校（は）
 正（ま）と（と）ん（ん）僧（は）の（の）ぬ（ぬ）と（と）て（て）。格子（は）の（の）ぬ（ぬ）を（を）き（き）よ（よ）も（も）り（り）ぬ（ぬ）。市（ち）中（ち）の（の）假（は）
 任（に）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）。此（こ）流（は）も（も）亦（も）偏（へ）屈（ん）ぬ（ぬ）。盒子（は）の（の）ぬ（ぬ）ハ（ハ）季（は）世（は）未（ま）書（は）の（の）流（は）
 少（せ）て（て）。や（や）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）。増（ま）て（て）七（し）十（じ）條（は）厚（は）以（は）希（は）の（の）事（は）。正（ま）書（は）
 ハ（ハ）誰（は）も（も）く（く）知（ら）ぬ（ぬ）。古（こ）格（は）子（は）の（の）ぬ（ぬ）。諸（し）古（こ）よ（よ）古（こ）人（は）達（は）の（の）ぬ（ぬ）と（と）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）。
 ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）。予（よ）の（の）方（は）少（せ）は（は）。是（こ）ハ（ハ）小（こ）ま（ま）と（と）よ（よ）の（の）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）。○ 此（こ）句（は）全（は）く（く）古（こ）格（は）子（は）
 ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）。是（こ）ハ（ハ）門（は）葉（は）の（の）信（は）不（は）對（は）して（て）。換（か）移（は）の（の）句（は）

十九冬六

と（と）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）。世（よ）ハ（ハ）さ（さ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）。ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）。さ（さ）す（す）り（り）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）。門（か）
 戸（は）さ（さ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）。此（こ）は（は）右（は）や（や）。さ（さ）す（す）り（り）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）。淋（は）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）。世（よ）の
 流（は）や（や）。さ（さ）す（す）り（り）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）。風（か）流（は）不（は）ま（ま）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）。格（は）子（は）の（の）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）。人（は）よ（よ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）。
 へ（へ）。格（は）子（は）の（の）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）。即（す）興（は）と（と）ん（ん）の（の）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）。對（あ）門（は）人（は）僧（は）乃（は）四（は）字（は）も（も）は（は）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）。
 ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）。句（は）を（を）す（す）え（え）意（い）味（は）を（を）何（は）の（の）つ（つ）も（も）。と（と）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）。送（は）り（り）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）。挽（は）と
 ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）。誰（は）よ（よ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）。古（こ）挽（は）り（り）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）。何（は）の（の）冷（は）何（は）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）。
 ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）。句（は）を（を）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）。一（は）句（は）小（こ）高（は）根（は）の（の）初（は）と（と）類（は）と（と）。二（は）つ（つ）を（を）
 ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）。志（し）く（く）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）。林（は）小（こ）扉（は）の（の）お（お）と（と）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）。志（し）く（く）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）。
 ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）。万（は）一（は）盒（は）子（は）と（と）決（は）る（る）正（ま）事（は）諦（は）何（は）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）。追（お）て（て）改（は）む（む）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）。
 ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）。正（ま）證（は）な（な）き（き）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）。古（こ）格（は）子（は）と（と）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）。路（は）の（の）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）ぬ（ぬ）。

一つうらむ也。○又此句申するは、媒拵乃以ふるべし。如く
 梧桐子よく榎あり。そと小。婿をさる古様として。いづれの
 うきとせん。あとも定めびくせん。志の古くすけたるは。古道
 具屋も。あふりて。きとふ定めびし。あつて。きとふ。婿の
 ちた。古格子いやく。あつて。をの媒として。いづる。媒拵の
 屋。○路通が事。頭陀物拵。小。味袋。安否。たぬ。あつて。あつて。
 高麗椀の。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。
 路を流して。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。
 太屋氏何某の。方小。寄居して。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。
 病死と。伝書三四巻。之。寫して。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。
 路の。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。

二拾

路の。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。

世の中をきく 宗祇の時雨也

袋云世小あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。

林云世小あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。

小世よ。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。

是日記よ。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。

うきとせん。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。

句と物。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。

也。此宗祇の句よ。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。

しと沈香ししがとりしめんけう考也 [白選] 云々世小うらもと
り杉風所持の短冊よの中とあり

[説] 袋一通りすたり [林] 淡波のふりり宗祇乃句物くもて成
又け句小標 いたるもちほくハ是れぬ但し又文字は事
爰日記ハ事ヲ撰りて誤る處きふも何ぞ雅言のぬめ
るを懐い入りの宗祇の延すけき。として世の中ハとぞ
くあわしを支考すまに去おせしと又えたり又世の中ハ
あやうざらうも回一ふらるの縁後よあるとハ宗祇の連字也
世の中ハ四角とハ俳諧の利口也連俳のワリ代りともあて
淡波の事のことと沈とせむハ依借おきたる()とてふるべきこと
三十一

坊と杉風所持の短冊よ翁の自存し世の中とありハなるハ
の得ありすや

ほほの詠乃くはやをるなり

[袋] 云是並巨燧すわとそりて詠乃の成りたり或人ほけぬ炭
焼ぬと云ハ詠也しよとそくと存置よ此と並るなりこのつり
か句也 [林] 解 此句と出さる

[説] 詠中の吟多しむハ此佳よあまう去りてつりもさるなり
其角が枯尾舞しつるハ是ハ為鎮和尚の歌なり詠の世より詠
病てまほしくあれぬのふも是と云ふハとてあやせ給ふ

○ 芭蕉 五

一かぢい合をけりしをわす。○ 若くはまぬと。在りけの句よ
えんうらハ尻をりぬ旅麻の糸こそハ。重くうけのさゆしつ
と。一所不住の執想乃句とせんう。増る金きや。又重くうけハ
まわしとるけりやとてわぬ。旅の尻尾つるぬよ。似しうも聞ぬ。
捨カ一の河去もええぬハ炬燵の句とやいとし

茶買子雪のゆくろや投紙中

袋 云深川八笈とて茶買子けと雪とてえうけて雪と紙中ハ
ぬうらる神也 **林解** 此句と出まげ

説 行をゆきしとていうけことハ古風の解めし入也也蕉門

わさあやうとぬうげとてか。一句あるの時自然と詞のつぎ
細あつてまひうけらるもて。是ハ雪れ日の興よ深川のくせ
紙尾よハ人あ合とてハ。粥などとしんいざ茶買也。紙の袋
さげておけりなう。つらとてとて。歌中おわづらう。云りぬ
即興の姿おしと也。投紙中の姿。うらう。うら。名人の句
案。か。ぬ。を。と。と。興。あ。ぶ。ん。き。事。し。

雪乃日や危れ皮の替つくれ

袋 云山中よ子居の極いてとて免の裘とてあひつらぬ心危連
す乃又或人曰雪佛雪連唐あしとて。序よ誠信危の白き替

つうけく子なき下知くは向ゆやゆらん在 **林解** 此句出戸ノ才マ
あこきと解さぬ少く見え也。

説 去来抄曰魯町口付句公如何去来曰前書子乃と何きひ
てく何も子とももの業と思ふ人しふわい理舎とわくす機兵
と繼破て知屋一ひく先師此句と決ゆ少く予高く感動す。
先師曰是と振つひのほと裁人のこととふい果てさうとん
結文我姫ふりし或人云雪城後危の塚よゆり去来曰此説の古事
神代の巻よ似たり或人云危の皮は蟹はハ雪中を氣と訪く
くめ也と著きと月小桂み聲とるくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

愚考古事記上卷大同主神菟小逢抄ハ一の
稀羽之素菟也と有文長少人畧も日本紀ハハハハハハ

今一神代の巻と
云いぬつ ○まづけ去来抄と證すと下一盤をゆりくくく
つちきまき雪の日小童アのき洋出くくき家とんくささ
やきうらんよ危の皮は蟹はも地をうけよかくと真し
の也翁乃風骨とありペー **袋** 五文字雪の中や記と句
選少と赤りけ是兩かづたがづく去来抄よ雪の日小と記と乞
と證とんがれおけ句おともまおといろく屋くくさるお句也

馬とさく下づける雪のおと哉

袋 ち猿人とろくく云湯出ま此馬とふくむるしと子新くく

よのつひ小馬と眺居ハかまれと雲と物ありと猿人のく小か

いゝの事かこゝしきしれ眺らん深一 **林解** 此句を出さず

説袋 注小児の雪とえて白くといふがぬ一 不可用 端をいつて

の集りもいすゝんをゆす 句選りもかゝるをのめとていふは
人の 後り流るゝと豊由 端をなくして 旅人であるが 句

落つてゆくゝゝ 翁何ぞ かくも手つとせんや 是百菴 といつて却

て翁も罪と課とといふは **○** 此句 二の初も心と身 一又

かゝしゝの初も 流るゝわゝ 咏の字は 歌くゝら 古来よりある

松原の伊勢
湯佐不家集
考えて 川のガヤ ぬるゝも 人への ぬれも ちりり

いゝゝゝ 我身世も ちりりも ぬれも ぬれも ぬれも

此句なごハ 上よ 春由とわらむ 下のあはれいよ 歌きながら

あまうゝも ぬれ流るゝらん 雨ニリ 又 順徳院建保二

年歌合 深山雨 流るゝのあも今や ちりりみや ぬれ流る

ひゝゝの ちりり ちりりみふ ちりりみふ ちりりみふ

ちりり 後世思ふ ちりりみふ ちりりみふ ちりりみふ

ちりり ちりり ちりり ちりり ちりり ちりり ちりり

ちりり 西土の書よ 飛耳長目 ちりり ちりり ちりり

目ハ ちりり ちりり ちりり ちりり ちりり ちりり ちりり

の希 ちりり ちりり ちりり ちりり ちりり ちりり ちりり

小あやし古と思ひ申すつ不祥も今の子よゆゆしくあくまひて
 破石は雄きうふふあふだ。破閫^{モタ}。達閫^{モタ}。ふりめし。今よちうけが
 ひきこむらわゆる思ひとやうらふるふいび。なごめや宿もいそ
 其心よるそいつやなきこと。思ひ申すと云酒もやう八想像の事と
 しく。さびや申せ。まありてわくこと。えをるやとめし。いあふるや
 此酒よ古と思ひやるんはなうだ。述懐又ハ懷舊の句かたに昔
 とあふし歌くつのもうけがなき時の。大をさうらふめて。嘆息す
 るものゆき。ま。さうらふだ。おのげうら。古へとあふや。ゆも
 此馬と咏るも馬をえるんふ。つゆはうら。ま。うら。味ハ辨へく
 咏まをえれむ。次句の秋と云句も了解を。次句の句ハ

云ふ。い。い。此書と池さび。此句乃解めて解る。○扱句意
 ハ此去冬の書中の旅人。さこそわを罷き事少てころを行ら。さ
 ごと。又艱難らひや。ま。れ。となご。あ。わ。れ。又馬え。あ。り。不。便。ハ。
 ひご。く。ま。よ。と。嘆息。ま。と。也。を。淋。樂。猿。也。あ。は。る。の。ま。い。ら。
 あし。は。中。く。此句の風骨中は。ま。い。ら。と。事。あり。ん。

月なき。師走と。子路の。寐えん。丸

袋 云此句のつれは。清女納言。う言ふ。す。ま。は。ま。き。り。の。昨。の。月。夜
 なく。揚。う。子。路。ハ。孔。門。の。子。路。勇。と。好。う。是。と。り。て。師。走。の
 丸。寐。の。と。さ。は。ま。き。ハ。子。路。の。寐。え。よ。丸。寐。の。と。さ。は。ま。き。

もなきに清き月をうけ形客也 **解** 之師走の月此すさゆき清
子路うろくし之系加庵し又代系子あり 此蓋し此の多の略す

説

兩書ともに師走乃月とつてむとや清女と引如きと之は

所よ奇潔もよふべし勇河をむとて清き物ありとありん

清女のすさゆきといふは冷の字に訓ありて勇烈乃さま

小ハ何とて烈の字に意ありんや清女もさハハ何とて

増て翁此句小えへず公時樊會とも作れども是全く中意

小何ぬとの氣 ○篁之記曰 此書偽書也人ありて之を説と云ふ南郭の獲蘭遺稿にも引用ありが後にも用也

十列冷物・師走月夜・同肩・同蓼水・老女假粧・女ノ酔タル

・法師醉舞・無酒神樂・胡瓜老タル・勅使被打囚競馬

九六冬アキ

・昆崙ノ仙舞画ニ之見小依てえれど清女より前小此事

何りて清女又ゆりつて南郭ハ師走の月と云ふべきやれ

あるや有らば其を成べしと造稿小池しと云ぬ ○考ふ小

此句ハ子路が義と守れりとの潔白なるふよきて月小對して

與どしありむ月白きと云ハ潔白のこめて冷しきつてハ何

ど敢小揚升菴白の字ハ異訓を承ふ日日光の白きを偏と云

月光の白きと皎と云ふなり月白きハ皎也皎月とも云也

子路衛子乱ありとすてくもつき微や滄より冠の緒を切

ましよ君子ハ死せられども冠とくふこととて其端を括ひ居

しつに後子賽殺されしを如何義者の心師走乃月此見え

海りくふむらきと也。海ひいづの乃此のわうと。
蕨とくことハ蕃椒のてくせりてヤコヤコ。この語も
のひや。風と云ひ合さるの吟ありむも知へず。ぬれ子路
ハ喻乃付りて。家々食なり。其ハ公案白をもち。買無
も。借淺をなく。蕨も志り。蕃椒のてくハカケをこ
る事子足きんからや。世ハ若しハ師走くも。我は
家ハハ月面白き麻さめと。一をトホ。つとやめて。風喻乃
白如麻。一りて。子路ハ家事なりや。或ハ小菰の胸
中ハ推量ハ在う。かくワの清貧の生涯。くけてん小
舊句意掌上乃玉と。るくや。あらん。感歎風喻。とくや。

一廿七冬ア十四

後の人し人思ふ。○再考も。ん。都て白中。重とらうと
り。あ。わと。る。ぬ。ハ。句位むくし。け子路ハ一句ハ如きと知
る。一。店の麻えりてハ。一句此のハ。子路と重とつけら
る。し。菰も此句ハ。け。ハ。さ。と。り。て。る。と。さ。一。也。と。ア
る。と。ハ。子路の名ハ。迷。ハ。る。と。さ。

増補

とをかくも。ち。と。や。雪乃枯尾并

説

此句三部ハ。出。ハ。是。と。由来ハ。子。句。あり。此句の出所

さういふ名所といふく通るさのぞ〜 ○ 其角が枯尾の
 の序ふ圓覺寺大興和尚とす。易に云く〜くれ〜さす
 て〜ひは〜或時翁の本卦也と云ふ年月日時辰
 古曆も合せて筮考せ〜す。華キョウや〜卦小あ〜是ハ本
 乃すき〜風ひ吹き〜の敷く〜ひぬれ
 るも命は並〜して世ふ〜海よ〜つ
 の〜こ〜も〜いも〜あ〜よ
 里つら〜や〜す〜し〜と〜云〜事〜い
 合〜の〜句〜不據〜感情深長也

鞍壺より小坊之家より大根引

〔説〕 去来抄曰蘭國云此句い〜ろ面白き去来曰吾子今解

衆〜一〜之〜花と園〜に奇山幽谷靈
 社古寺禁闕等よ〜ん〜少〜古本多〜如此
 類ハ其の〜少〜す不疎〜そ〜又〜句〜て
 形好ま〜か〜物〜ん〜ら〜と〜し〜用ひ
 を希〜あ〜と〜画〜も〜し〜句〜て
 け〜し〜大根引の傍〜馬の首〜け〜
 鞍壺よ小坊之家〜と〜右〜

松しんや葉せしは——葉園の兄何某却て弟をうけ感銘さ
すかきハ俳諧と云ふすと云ふも画と能くも少也高師尚景の
子也と云ふ○一とせ或人のりて少く鶴此配偶する少小讚ふと
あつと見ゆりいふ所愛あつとを親兄の希ふも出さるれど
まつと表具は繁る画も常人なる少いや師よ少く心ゆく
うとましく思ひて翌日持たれ入つつ少く後あききを懐
なるとや鶴此母と是と云ふ世よ画讚也素丸ハ讚の法
と云ふ少くはとつと点者もあつと云ふや全く後よあつと
いふとせりあつと未熟なる也讚の法印し初めて俳諧の
あつと少くやまはあつとあつとくくも持たれ門弟あつと

九九 冬 十六

いさめてまひやうと云 持しんやを後ハ同リぞあつと

五の月代や 毎日アツとツツ 解乃音

説 此句ハ元禄六年の筆也 ○芭蕉翁行状記云今ハ夏先師

去年の筆考ハ是しと云ふや二十日ハ此解の音也
あつと云ふハ兼好法師の解の音也
あつと云ふハ兼好法師の解の音也
兼好も終る伊賀の酒と云ふと云ふと傳へふ人や再夜せふ
せつと云ふハ風雅と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと
とあつと云ふハ亦もくつと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと

余生則辭世也何事と世はよわくしやとて臨終のさう句もねり兼
 好法師もかゝるこゝけりしとくや足赤らひ合々れは兼喜の句も
 成りしとて多くとたうと云ふ○兼好一代乃名前のうしゝ
 のこそうに近き有明と云ふこのりかゝれとくや人ふちとぬ
 乃やぶの論へのさしをりてんを臨終のらうやわな臨終とも
 こそあや此句を南無よ裁入るるのこなり又評掛と云ふ
 こそりきど毎日よ近しとて河の裁入連続とて一はふ年の終乃
 兼好とて云ふ○宗瑞云按どうん評よ季とりてせらるるのこ
 もりてん有毎よ毎日あきと年の終れば悲しとて明らうと
 解の考すえらうと世はとてきと困居るすかゝるはあはれん

貞徳翁讚

幼名や ち〜ぬおきおれ丸頭巾

① 百菴万々兼ふ此句と解して云ふぬ翁とてつる本拾遺
 旋頭歌小ほもわんそこの句もけ小向ひわてえらめとてと
 ぬ翁よりよらうとすれ其存後ま庵宗祇法師画像自歌よら
 ーとてハ兼好ふとて世れとてとぬ翁とてやま小ぬと
 漸り我親の家あぬとて此句と裁入る貞徳の淡小せと
 ーと云ふ此句幼名や不知翁とてつ續きハやけつとて
 貞徳の幼名勝熊後小勝熊のちとて道遊軒と自林と

まづ芭蕉翁も吾々祖先の幼名を不知ハ疎略也といふ(○)考ふ
 此論甚不審也。第一小次嶺經卷四山城国乃名所と云集あつて云
 とい止村季吟の述作也といふ。吟花廊道遙軒貞徳の地と妙法院
 御門主より賜つて建てたと云貞徳名のハ勝態といひ一別髪
 とい勝越軒といふも用あつてして妙壽院道越軒と改めしは終
 了。延陀丸長頭丸外もつづき然るに季吟ハ勝越といふ貞徳乃
 丹子也。勝態のまをわづめて。道越軒といひしはふ記。昔ハ道遙
 軒と改めし。うら。荘子の道遙遊より。ちんすの。香れぬり
 といふハ。季吟といふ記。きよ。丹子ハ。芭蕉の祖先ハ伊賀
 といふ。桃地黨の。桃ハ桃井也。太平記の比舞乃家より。貞徳

ハ松永傳正が末裔なりて。芭蕉の祖先より。其説毫まゝ。又俳
 諧道系乃し。めし。俳祖とも。道祖とも。記す。細
 細先のまハ。氏族より。俳諧の血脉派流の事。た用わぬ。文を
 あり。鳥辭も亦。小惑説と申して。云。た。成ハ。承平。勝宗。清。末
 流也。依て。宗房と。初ハ。名宗。と。是。録例と。如此系圖と。い
 ん。中。宗。室の。宗。ハ。宗。近。宗。公。時。の。時。ハ。時。政。の。時。ハ。小。兒。の。帝。と
 止。ハ。元。乃。四。一。板。む。よ。世。人。迷。の。始。必。も。信用。す。一。ハ。
 俳諧ハ先祖と系圖も。い。上。古。ハ。墨。量。次。才。も。今。一。派。と。是。て。
 師の系圖な。ても。名人。名。哲。を。登。ま。ハ。今。不。傳。了。何。と。風。非。平。若
 よ。う。ん。や。翁。ハ。隱。道。仁。也。系。図。ハ。一。ハ。の。や。ハ。ね。ら。む。と。い。は。す。

○ 深川の素徳士じつと黒露よ語て曰桃青の石
ハよの比京都の儒醫小桐山正哲と云博識ありしをいへん一併字
名よつててれと翁最初小礼まゝいふ詩經桃夭乃篇より桃
青とハ名づけりともや。見ハ桃井の音とててハ姓とつていへん
中。押しうふべき也。少くも氏族の松尾と名宗一ともや。け正哲を
俳名と智機とて。長崎の大通師。榮木仁左衛門が舎弟也と。先年相
中菴ヲよお傍りゆりす。爰の記して。偽説と正すりのし。夫考十論
小梅子未熟のつとつや。泡と一車ゆり。まよるハハ地とて。湯よこもこ
る。此句切名や。いふやハ歌戻のや
て切や也。百菴ハハ山の中。口合のや。命のあはとて。あや。海

切名ハハ切つとつたむ。や。みり。お歌戻とて。貞徳切つ人の切
切つ川切つぬ。芭蕉うしもな。句意ハ切名ハ勝徳丸ともいへん
此丸。古き人多れむ。さひえも。昔。信てまぬ翁と。今の翁と。裁入
と。係と。動と。いへて。そ切名ハハ。いへ。猛と。と。ゆ。き。が。海
長江丸と。世ハ。極と。ゆ。此丸の世活や。きの。や。さ。翁と。な。む。と。い。ふ
を。さ。ふ。ろ。と。い。ふ。今。此。翁。と。い。ふ。ま。更。不。對。せ。し。む。い。へ。丸。以。中
信。い。へ。古。人。云。一。き。と。余。情。や。ゆ。め。と。い。ふ。句。也。切。名。ハ。ハ。丸。に。中
不。知。也。切。名。や。く。歌。戻。し。て。その。暮。入。つ。と。裁。つ。ゆ。ふ。と。と。白。い
な。り。と。い。ふ。虚。實。と。い。ふ。も。ふ。せ。よ。多。う。と。い。ふ。

○ 卷之五

我くこのとほくつゆは。るしむ。よやまきんぬ。そ
きんくつゆは。いへうれかぶる。あまのひか
りきくく。師をたすは。八日。りて。そはく
うはくい。

うらさや。幸。店。り。ま。う。り。わ。り

初。ゆ。き。や。う。ら。仙。の。葉。た。ら。む。す。で

説 此句諸書に。ほくつゆと。か。り。た。む。む。わ。り。と。此。を。お。し。う。り。
と。も。お。し。う。り。と。人。の。訪。ま。り。句。や。ら。く。と。ら。ふ。人。の。み。や。い。今。一
杉。風。の。家。珍。の。箱。自。筆。の。一。軸。ふ。り。と。て。け。て。沈。之。是。ハ。真。享。の。妙

乃。美。善。師。也。初。春。の。う。り。年。尾。す。で。の。句。二十四。番。有。可。信。也。け。句。此
説。と。あ。り。て。句。意。お。よ。し。う。り。と。是。よ。く。う。り。と。葉。の。戸。は。ゆ。る。場。も
い。へ。り。と。た。り。と。ふ。記。を。き。ま。さ。し。と。や。信。世。注。者。乃。藤。未。ふ。り。句
と。ゆ。り。は。ま。り。

の。ら。て。あ。る。ひ。と。ふ。あ。ま。ら。ゆ。や。さ。ら。う。り。も。

な。ま。き。あ。り。は。く。ま。あ。れ。む

め。て。う。り。人。の。う。り。に。書。入。じ。ま。の。書。

説 此句の詞を句選よ。いへうれかぶる。と。い。は。と。い。と。の
き。く。い。と。記。す。今。右。の。美。善。の。一。軸。と。り。つ。て。正。と。蘇。て。信。世。の。書。

おぼたふして句意入りワリとてわらわおどし。みかえらるる係とあり。

やふるにこそささくらさくら

そぎむこづあざにあらねるころのそ

① 白選子。田嶋詞と出でて。白とて年の暮と記し。冬の郡よ
おせし心とあり。新ふう杉風家什の一袖。此句もゆふの
浪よいふよりふろろとせ。森の松よりとあり。あざとあざむこ
向も。歳旦とそゆ。春乃那よ記す。きげ。事多くて。りしは。雪に
今つづ。わしこそささくら。おとせ。白意ハ正月餅と。餅とあり。
よや。餅厚とて。追ふ縁海と。ちと牛と。追ふか。ふつと。ねとあり。

ち風の浦也。たまらぬあおせい。うつすの句也。詞出小。そとさくらと
とろふ。白選子。の暮。して。木の秋。よ。前後のお。庭。麻
末を。居りの。天。文。轍。と。と。出。集。も。ゆ。も。ら。と。む。ら。れ。と。ふ。ふ。
やし。そん。由

智月とてたの栴とふく

少将のあまたさるるや志が濃雪

あまたさるるこあらはし

是示正筆。あつと。お。終。あ。と。ら。ハ。不。記。① 猿蓑。炭。懐。集。少。大
津。尼。智。月。と。ら。る。こ。も。ハ。少。将。尼。之。奉。 井。蛙。抄

行宣法印の信實朝臣女三人あり

少将内侍 并内侍
藥壁内院少将

いふゆゑに

藤原の院の少将たるに秀造と名のつよきと名のよきとん
らひもあつてもやうしんとて感して系統の老はよ言今
とて河之らる。妻書よ國母仙院少将及依為妙道之堪能不願老
眼之不堪書寫之云少将内侍、先よりせてお人の跡より并内侍 藤
原
院門院乃少将老なる出家して法性寺の旧跡より住より平親清
女子吾妻よりつりてくる名譽れんをいふえとてせんして法性寺乃
宿正へ歸りまうりり持佛堂よ入て障子よりゆかりのまほき候
うふなりせまよ候つこし此れ法すきも涙よ面をくも老のゆゑ
そくまりしせよとていふかのおのう終のつおとつりあはれりせよとて

せよんがしあゆめとていれけるやさしく優ふるをゆれいふはと
争つてあおくりてあまそ中あゆめ云此はもと并内侍のりも記を
見。女兄才之人あがりこれあよとあてけ藤原の院の女おことんあよ
みし。およ出家せし庭よ。少将の危とうふ。又おのぶぬの少おとつとも人
いふ也。○白意を。智月も其愛常れ危おあつたむ。りまはる
庭も。あすべまう。少将の危おあつたむ。りまはる

何れもあまきのいふてあぐとけ

説 白選よハ。さゆふもてて死す。○白梅園路水の俳諧良材よ
曰翁一とせきのいふてつとけを白せすゆけみふとて

て後の信徳う東武小第とむつととゆく何とむふの七言とに
られ信を信屈乃神とゆくゆかやの海舟ゆくと幸立ゆか
しめの日風とつ一信とてより何とこの早霜と布袋乃神小
なうい都鄙の吟詠と宗祇の履子あーやとわーて一度ハまふ
一度ハまふり川の流さぬとてまうもりの水舟ゆくとささ
むのつさーとはう日東乃杜子美句う今の世北西行あり花晨
月夕も昔乃迅速の風れれと成かつて足て尋牛得牛の大落と
はなせしゆいあや白く書くやと色す色ハ烟子とち年耳すむ
の表わす是ゆんつわ一の今も揚ゆくととらあなりとき此境
ありて此神とてう家あそと海を神ハと人よゆゆれとてハ夢とて口

と夢い得らん事やとゆくととも用ひむるもゆくと成らぬあ
其人と初ら業ハ只及とととととととととととととととととと
と心くけん人ハゆととととととととととととととととととと
とととととととととととととととととととととととととととととと

右冬部終

十有八章

雜部

何さ、二言きこのまらし、海をわく、

句選

小物をきこみ文字と出し記し、秋季よ入也、又雜の部、小わ

りこと物と、一句と二句ありて、物とりの言、不埒也、此句の解、世

こ、少ら家下

―

句解

小蓼の中句ハ松の行脚れりし言

此句の言、一名所、雜の格也、物言、句意、

んま月、物、出て、句の言ハ麻の棹、

こ、松島、り、けて、ま、と、え、乃、公、と、き、て、わ、く、ふ、作、ま、く

是を考へて、む、さ、と、き、な、り、此、句、中、片、分、る、事、ハ、甚、ハ、平、忽、れ、り、

批七 冬十四

あ、つ、す、や、は、も、つ、下、れ、家、通、り、も、麻、屋、さ、つ、こ、人の故なく、

說

三書とも小、此句解、

つ、あ、い、終、笑、と、麻、の、棹、の、き、り、こ、ら、盲、者、の、後、毒、

後、世、小、流、を、も、の、也、と、い、つ、き、此、事、あり、や、又、平、忽、と、ハ、不、解

忽、卒、と、ハ、す、み、や、う、ぬ、と、ハ、さ、ま、あ、り、と、ハ、平、爾、と、ハ、此、誤

と、也、や、尤、不、審、也、此、句、亦、も、く、や、解、し、も、人、外、

う、り、鼻、の、先、眼、れ、希、よ、り、家、と、又、い、て、遠、き、り、て、ま、は、世、の、

い、つ、と、ひ、ふ、り、ぬ、○古今抄才三よ、い、の、れ、分、れ、撰、集、の、

雜、と、云、顯、あり、と、雜、の、部、ら、う、も、ら、う、と、連、排、の、を、名、と、傳、

今の俳諧も是と評す、雜の發句ハ多ク、
四季乃勃立少、曲節と云、
其句其名と出、風景の情と云、
春の法、
雪の吟行、
と云、
何ぞと云、
才小、
○ 解

此ハ冬ノ九五

不吟味也。依て古今抄を引て、
内、素堂夜話聞書に曰、
ら、
○ 馬光日記乃
○ 考る小此句意を
○ 澹齋云洞の下に、

人何ぞんといふや。かゝるをば家。今松尾へあつて足らばじ
 ては一人をさつるもよ。さへハワの風飛ようも。一念想
 せやと。執事か。かくの。くみ。然る。一。誰か。ハ
 一。何と。作流子。い。け。と。同。云。田舎。ハ。訛。も。極。先
 去。酒。發。句。小。入。つ。い。て。と。や。然。各。此。さ。り。ハ。訛。も。極。先
 だ。一。又。一。向。予。訛。も。酒。如。も。所。と。う。此。方。言。な。ん。ハ。池
 け。乃。白。西。り。と。あ。て。と。す。き。み。ん。既。小。清。風。が。り。ん。有。り。ハ
 一。の。ハ。ワ。の。帝。り。て。痛。する。な。り。と。白。ひ。り。一。是。を。而。く。濃
 河。と。裁。入。く。他。所。へ。は。動。せ。ま。き。一。助。も。あ。り。な。し。松。尾
 乃。吟。け。ハ。奥。の。酒。を。入。し。ハ。訛。も。い。や。一。む。へ。う。す。物。よ

批九 卷五七六

さわそそを。と。所。た。い。ふ。居。り。句。意。も。一。は。切。ふ。す。え。し。也
 在の事ハ。い。う。り。家。紙。乃。や。と。い。ふ

笈日記云三月四日元禄武江よあつ上日ハ阿叟の忌日つと
 として桃隣へさあつて深川の長溪寺よすしてはる史邦が小文庫よ
も長溪寺とあり
史邦が小文庫よ
も長溪寺とあり是ハ阿叟の生前よ移すヤ。い。ま。き。こ
 今又此塚と發句塚といハ。の。中。ハ。さ。う。な。家。紙。の
ヤ。と。い。ふ。此短冊とい
 堀小埋めきりやん。此者白身もき。一。生。れ。世。を。了。る。人。一。と
 移風のぬー。い。う。り。と。い。ふ。

說 世小長養寺の翁乃塚と。阿叟塚と。い。ふ。人。す。所。り。是。也

○ 卷 五

ちと誤也。史邦が小文庫也。發句塚をわたり。時ふかしく
たろひく。本誤とさく。人乃。ち。か。か。る。此井ふ番
し。事。の。ゆ。わ。老。衰。氣。憶。備。ず。并。中。持。ぬ
存世人のく。時。く。正。一。冷。事。族。の。

蕉翁發句說叢大全第五大尾

四十句跋

跋

何々何々。師。在。馬。の。口。や。お。を。憎。や。又。哺。の。乃。ハ。知。事。
其。通。く。あ。一。さ。る。乃。は。は。い。も。あ。い。も。一。一。さ。
一。容。此。道。業。乃。あ。く。祈。四。十。年。来。け。乃。り。て。接。ひ
つ。氣。さ。お。さ。も。も。さ。く。さ。ひ。り。し。し。母。的。お。す。く
り。お。あ。り。た。か。う。好。ら。新。あ。一。一。色。大。塚。を。知。す
あ。い。あ。の。さ。く。さ。く。口。一。矣。さ。く。一。系。務。も。け。存。の
反。よ。出。あ。ん。つ。ま。う。ま。在。氣。う。し。流。き。し。も。は。う。も
下。く。一。一。一。や。と。川。一。一。の。乃。素。丸。一。一。

素々〜子時明和〜と云々林鐘の

けい〜〜このわんぱんを

り〜〜も乃人の〜

跋

和跋一

凡經中子集の類皆注解ありて其注
 者の見識此精粗氣質此偏駁ありて好む所
 乃手料理可啞の辛きありて水臭たありて中道
 此鹽梅ありて味色の多し響ふ蕉菊の白解
 濃諸妙世に流布を教の少くは次夫を佛
 道此多端ありて王子公孫の威儀あり

下車馬士船頭乃振之合芝居也乃振之每街
 の歌謡はても振い多し此を賦比興乃云俗
 亦配一信談平話及びて風雅頌の三體を扱
 ぬ後の人は是を釋せしむ五所なる方言五音の
 清濁の遠も有る何れ一朝一夕に解し一書
 たりや其解する人は其氣質の稟多し事
 奇しき事ありて此の道の人を不知と不知

和歌二

をりて後世に譲り心乃按排を加え此邪
 慢の人ハ不知と云已る管見は附會一誤也
 然ても是の辭つて實非尔非を藝ぬせし身
 女子に似せぬ壯士も何れも醫者に化る出家を
 其殊粒を放さぬ神主もあや天狗も似し
 山伏も有る其柔弱も於處を暗味も高慢も感
 自己乃得るに帆を上げ大洋にも走んと此是

亦對して論をふさぐハ漢樵乃云持ありて
 之禮も周人乃死鼠鄭人のあつたはるは此風信
 色何れも是を以て答ひあうことを童初の謎く平
 行條と解んべ例とるはしあつと云ふんも亦
 理乃以きらうて〜茲に絢堂の老人性俳を
 嗜む行立坐臥亦是な廢ちる蕉翁如心操を
 量甲白意乃齟齬するとの後學れ遊ん事

和跋三

を深々歎き新に注解せん事と歌一内典
 外典より風流の今物語するに其理も當もるを
 不洩十餘年の功業より又書に説業大全を
 つて説とは諸族也業とち集略也諸抄を集めて
 全く正當の解をふす誠と能くあつてつて
 其れも色莫邪と鈍と〜鉛刀を利とて其人
 こそ多し其れ此れ乃解するに難しと人有人の

假令往穉乃粗密をあらうとも其志乃真を争ふ
 御才暴ハハは辱るき予色此人と悞ト夕可菴下
 不遊如事多幸此老の主一無適乃志一宗一派
 依績見於尔随ハ聞ハ臨ク感賞寸後學の士
 此書ヲ閱一して謹ク其志乃深厚を仰シ
 衆音の象ヲ摸とるの如く一所止居るを必
 誤事事何ん抄子乃因兩ヲ見越入道と見て他

和跋四

尔笑ハ爲屋々々其能精神を定めその其蘊奥を
 探り絢翁の志ヲ繼ヒテ怠居るやあつらんか
 蕉翁乃骨髓ヲ至らん事又難く〜と物犯
 川ノ岸辭を不顧其趣を述中又大尾小題す

云尔

癸巳の〜

〜

郷唐誌



說叢大全跋

漢跋一

蓋蕉翁之於德音也其盛
 矣乎片言朝咏嘆則洋溢
 乎天下之耳焉一章夕吟
 呻則膾炙乎天下之口焉
 然而風調出神髓清味潛

說叢大全跋

漢跋一

蓋蕉翁之於德音也其盛
 矣乎片言朝咏嘆則洋溢
 乎天下之耳焉一章夕吟
 呻則繪炙乎天下之口焉
 然而風調出神髓清味潛

淡_レ薄_ニ澹_レ乎_ト其_レ不_レ可_レ究_ム也非_レハ
 善_ク逢_ニ其_レ原_ニ者_{上ニ}未_シ矣越_ニ頃_一年
 三_一部_レ注_一解_レ競_ヒ起_テ而_レ兄_一弟_一鬪_{セノク}
 于_レ牆_ニ其_レ說_レ囂_{然ト}載_ニ鬼_一一_一車_一
 復_タ妄_{リニ}鑿_一空_ノ導_ニ人_ヲ於_レ迷_一塗_ニ豈
 不_レ痛_ヤ乎幸_レ絢_一堂_一主_一人_一素_一丸_一

漢跋ニ

君_ニ崛起_レ江_一左_ニ有_テ闕_{スル}之_レ于_レ夙
 于_レ夜_レ憂_レ之_ヲ耿_一々_{タリ}焉遂_ニ爲_ニ後_一
 昆_ニ忘_ニ唇_一寒_一秋_一風_一之_レ箴_ヲ以_テ成_フ
 此_レ稿_ヲ也褒_シ之_レ貶_シ之_レ臨_テ文_ニ不_レ
 諱_ニ廢_シ之_レ舉_シ之_レ當_テ論_ニ不_レ讓_レ徵_{上ニ}
 之_ヲ取_テ之_ヲ左_一右_ニ歷_{アミ子ク}涉_リ諸_一家_一苟_セ

無_ニ沿_一襲_一之私可謂不_一朽_一之
 明_一辯_ニ也_ニ是_一篇始_テ出_テ蕉_一門_ノ之
 蒸_一塞_一闢_テ之_ヲ廓_一如_{タリ}嗚_一呼_一時_一機_ノ
 之否_一泰既_ニ別_{レテ}而_一洗_ス蕉_一君
 一_一字_一一_一淚_ノ之_一心_一骨_ヲ矣孰_カ不_ニ
 雀_一躍_セ哉又_一內_ハ則_一慰_ニ也_一翁_ノ之

漢跋三

幽_一憾_ヲ而_一致_ニ孝_ヲ於_一焄_一蒿_ニ外_ハ則_一
 警_ニ醒_ノ衆_一人_ノ之惑_ヲ而_一傳_ニ鑒_ヲ於_一
 後_一來_ニ矣可_レ感_ニ斯_一卷_モ亦_一丸_一君_ノ
 一_一言_一一_一淚_ヲ也_ニ僕_カ之_一小_一黠_一雖_一
 已_ト及_レ茲_ニ而_モ黍_ク奉_{ハル}筆_一授_ノ之_一命_ヲ
 敢_テ猥_ニ以_テ餘_一墨_ヲ汚_ス殘_一紙_一辭_ス罪_ヲ

無地爾于時

安永二癸己春三月

北武州奥驛備後郷

門人敬林謹跋并書



文化五戊辰年十一月求板

三都書林

京寺町二条下九町

野田治兵衛

江戸本石町十軒店

西村源六

大坂心齋橋唐物町南江入

森本太助

同心齋橋南久太郎町

前川嘉七

同御堂筋及町南江入

藤井六兵衛

○卷第五大尾

無地爾于時

安永二癸己春三月

北武州奧驛備後郷

門人敬林謹跋并書



文化五戊

三

乙云...
文淵三十五年三十七年乙

